津市埋蔵文化財センター情報

まいぶん津

2006.12.28
創刊号

市指定文化財 高茶屋銅鐸１号鐸

新しい津市の遺跡① ～旧石器時代から古墳時代～

1 はじめに

平成18年１月１日、10市町村（津市・久居市・河芸町・芸濃町・美里村・安濃町・香良洲町・一志町・白山町・美杉村）の合併により新しい津市が誕生しました。

西は奈良県境から東は伊勢湾岸まで、多様で豊かな自然に恵まれた新しい市の人口は約29万人、面積は琵琶湖よりも大きい約710㎢で、三重県で最も広い市となりました。

現在、市内には2,712の遺跡が存在します。ここでは「新しい津市の遺跡」と題し、市内の代表的な遺跡を紹介していきます。

2 旧石器時代～縄文時代

市内で最古の遺跡としては、後期旧石器時代のナイフ形石器が確認された四ツ野Ｂ遺跡（高茶屋小森町）、大古曽遺跡（一身田大古曽）や高寺遺跡（一志町）などがあげられます。

また、縄文時代では、草創期末頃の高瀬Ａ遺跡（白山町・旧称:広垣内遺跡）をはじめ、早期では西出遺跡（美里町）で竪穴住居20棟が確認されるなど、この地での定住生活の始まりがうかがえます。さらに、中期から後期には雲林院青木遺跡や大石遺跡（ともに芸濃町）など、多くの遺跡が確認されています。

3 弥生時代

弥生時代に入ると市内の遺跡は飛躍的に増加します。ここからは北部の安濃川水系、南部の雲出川水系と市内を大きく二つに分けてそれぞれの地域を見ていきましょう。

まず、安濃川水系では、県内有数の拠点集落である納所遺跡（納所町）をはじめ、森山東遺跡（長岡町）で小区画水田跡、蔵田遺跡（納所町）で灌漑用の井堰などが確認されるなど、大規模な拠点集落とそれを支える生産基盤が沖積地の広範囲に及んでいることがわかってきました。この安濃川水系では、江戸

津市位置図

主要遺跡分布図（旧石器～古墳時代）

時代に野田銅鐸(野田)、大正6年(1917)に神戸銅鐸(神戸)が出土しています。

次に雲出川水系では、中流右岸の片野遺跡や鳥居本遺跡(ともに一志町)、下流左岸の赤坂遺跡(木造町)がこの時期の大規模な拠点的集落として知られています。この水系でも中流右岸で江戸時代に風呂谷銅鐸(白山町)、下流左岸で昭和61年(1986)に高茶屋銅鐸(高茶屋小森町)が発見されています。なかでも高茶屋銅鐸は、工事中に複数個の銅鐸が発見され、隣接する四ツ野B遺跡との関係が注目されています。

4 古墳時代

古墳時代では、地域を代表する古墳(首長墓)造営の動向は、安濃川水系と雲出川水系で大きく異なっていることがわかっています。

まず、4世紀に雲出川中流右岸(松阪市嬉野地区)に全長40m級の前方後方墳が次々と築造されていくのに対し、安濃川水系では4世紀末から5世紀になって下流域に池の谷古墳(垂水)、中流域に明合古墳(安濃町)が相次いで築造されます。ただし、前者が全長約90mの前方後円墳であるのに対して、後者は一辺約60mの方墳と墳形が大きく異なっています。

5世紀後半から6世紀前半には、市内各地で片野池2号墳(一志町)のような、小規模な円墳が築造される一方で、安濃川中流域では鎌切3号墳(野田)など、全長が30m前後の小規模な前方後円墳が次々と築造されていきます。古墳の形や規模、埋葬施設の形態、出土品は地域や時代によって少しずつ異なることから、その違いが地域や首長の性格を検討する上での大きな手がかりとなっています。

また、この時期、古墳以外では、大規模な祭祀場が見つかった六大A遺跡(大里窪田町)や初期須恵器を生産した久居窯跡(久居藤ヶ丘町)などが広く知られています。

6世紀後半から7世紀代には、市内各地に横穴式石室を採用した古墳が数多く築かれます。その中には豪華な副葬品をもつ大塚C1号墳(安濃町)、薬師谷古墳群(一志町)などがあります。また、安濃川右岸の長谷山山麓には、平田古墳群をはじめ、460基をこえる古墳が築造されており、県内有数の群集墳である長谷山古墳群を形成しています。

ところで、三重県立博物館に移築されている鳥居古墳(鳥居町)の石棺は、一志町井関付近で産出される砂岩を刳り抜いてつくられています。井関石の石棺は、一志・久居地区を中心に広く三重県の中・南勢地域に分布しており、この地域の特色として、石棺の製作工人の存在がうかがえます。　(伊勢野久好)

市指定文化財 高茶屋銅鐸1号鐸

片野池2号墳(円墳;直径35m) 墳丘を覆う葺石

よみがえる伊勢国司北畠氏の館

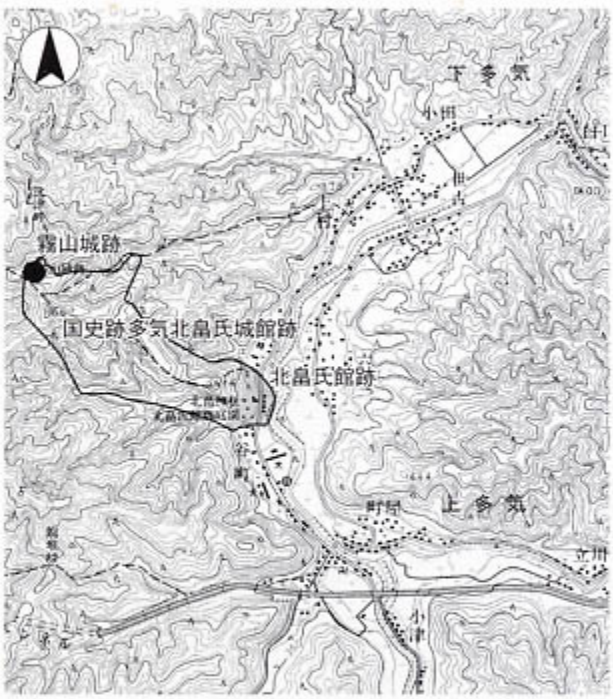
1 はじめに

北畠氏は南朝方の中心的な人物であり、南北朝時代の動乱期に伊勢国司として伊勢国に入ります。しかし、劣勢の南朝方は田丸城(度会郡玉城町)などの平野部の拠点を失い、山間部へと移動し、ついには津市美杉町多気を拠点と定めます。北畠氏は平野部での勢力回復後も移ることなく美杉町の多気を拠点とし、戦国時代に織田信長の伊勢侵攻によって滅亡するまで伊勢国を支配し続けます。

多気は、雲出川の支流八手俣川の上流に位置し、谷沿いに南北約３kmに伸びる盆地で、周囲を険しい山に囲まれた天然の要害です。

一方で、多気は伊勢と吉野(現在の奈良県吉野村)のほぼ中間に位置し、盆地の南部には大和と南伊勢を結ぶ最短ルートである伊勢本街道が通る交通の要衝でもあります。

現在も多気には、北畠氏館跡庭園、霧山城跡をはじめ、寺院跡や館跡、古い地割りが良好に残っており、これら北畠氏関連の遺跡をまとめて「多気北畠氏遺跡」と称しています。



遺跡位置図 1:30,000(国土地理院『伊勢奥津』1:25,000より)

北畠氏館跡はそのほぼ中心に位置します。

2 発掘調査でわかってきたこと

発掘調査の成果、絵図や地籍図の検討から、多気には北畠氏によって築かれた中世都市の町並みが良好な状態で残っている可能性が非常に高いことがわかってきました。

多気北畠氏遺跡の中心である北畠氏館跡では、平成８年度から発掘調査が継続して進められ、平成17年度までの調査面積は合計約3,600㎡にも及びます。館跡は、南北と東端が河川によって、西端が霧山城跡から東へ続く山の急斜面によって区画されており、南北約200ｍ、東西約110ｍの台形を呈しています。また、館跡の断面の形状は大きく上、中、下の３段に分かれ、西から北畠神社を中心としたところが上段、県道と宅地のところが中段、八手俣川左岸の田畑として利用されているところが館跡東端の下段となり、上段と下段では比高差が約７ｍもあります。

北畠氏館跡の時期は、15世紀末から16世紀初め頃を境に大きく前期・後期に分けられま

多気北畠氏下絵図(津市美杉ふるさと資料館蔵)

北畠氏館跡　石垣（前期）

す。前期は、上段を区画する中世城館で日本最古の石垣が発見され、館跡の中心部分近くでは格式の高い礎石建物をはじめ、いくつかの建物跡が見つかっています。後期は、前期に使用した館跡上段の石垣を埋め、東側へ上段を拡張しています。さらに、館跡南部に今も残る名勝北畠氏館跡庭園が造営されます。館跡庭園の面積は約2,800㎡、枯山水と池泉部分を併せ持っています。庭園が館跡上段に占める比率は非常に高く、館跡の中で庭園がいかに重要なものであったかがうかがえます。また、館跡の北側では礎石建物や掘立柱建物、区画溝などが複数見つかっています。

3 発掘調査でみつかった「モノ」

北畠氏館跡では発掘調査に伴って膨大な量の出土品が見つかりました。日常生活や宴会などで使われた大量の土師器皿(素焼きの皿)類をはじめ、調理等に使用された鍋や鉢類、瀬戸・美濃、常滑や信楽、備前など各地から運びこまれた陶器類、北畠氏の権勢を物語る中国産の磁器類や、刀や鎧の一部、金銅製の建具の引き手金具や銅銭など、多種多様なものが出土しています。

4 国史跡「多気北畠氏城館跡」

本年7月28日、北畠氏館跡の東端から霧山城跡までを一体として東西約1,200m、南北最大約400mの範囲が新たに国史跡の追加指定を受けました。館跡背後の山腹にある詰城跡も新たに史跡に加えられ、史跡面積は約27万㎡となりました。

5 おわりに

北畠氏館跡の調査成果を述べてきましたが、調査が行われた範囲は、多気北畠氏遺跡全体からすると、まだほんのわずかに過ぎません。多気は、越前朝倉氏の城下町として有名な中世都市遺跡である福井県一乗谷朝倉氏遺跡に匹敵するとも言われています。今後の調査によって、北畠氏館跡をはじめ、城下に広がる中世の町並みや人々の暮らしが、より具体的にわかってくることでしょう。　(石淵誠人)

北畠氏館跡　礎石建物（前期）

名勝北畠氏館跡庭園

北畠氏館跡の出土品

国史跡　多気北畠氏城館跡(北畠氏館跡と霧山城跡)

国史跡　明　合　古　墳

この古墳は、津市安濃町田端上野の安濃川右岸の経ケ峰から派生する標高40mの丘陵上に位置しています。昭和24年（1949）津高等学校地歴部によって、この地域の古墳見学の際に発見されました。三重県文化調査会委員の鈴木敏雄氏の実地調査等により、県下最大の方墳であることが判明しました。次いで、昭和25年９月に、三重県文化財調査委員会（三重県文化調査会を昭和25年8月30日改称）委員の山田勘蔵、村治圓次郎、竹島基三の３氏によって調査され、昭和26年に文化財保護委員会委員の梅原末治、斉藤忠氏らの調査を経て、周囲にある陪塚を含めて昭和27年11月10日に国史跡に指定されました。

まず、主墳は南北の両辺に造出しが付く２段築成の方墳で、その形状から「双方中方墳」とも呼ばれています。規模は１辺約60m、造出しを含めた全長は81m、高さ約10mあります。この規模は全国の方墳の中で第10位の規模を誇り、墳丘の体積は14,000m³と推定されています。

墳丘は発掘調査されていないので、埋葬施設等の詳細は不明ですが、墳頂部及び一段目テラスに円筒埴輪列、墳丘斜面には葺石が確認され、周囲には濠が巡っています。遺物としては、円筒埴輪・盾形埴輪・靫形埴輪等が採集されています。

次に、主墳の周囲の陪塚は、かつては８基あったといわれていますが、現在は５基の陪塚が残っています。いずれも方墳で埋葬施設は不明です。

陪塚１号墳は、主墳の南東側に３基並んだ陪塚の最も南側の古墳で、開墾によって形が崩れています。その規模は、１辺11.7m、高さ1.8mと推測され、葺石や円筒埴輪列等の外表施設があったようです。

３基の中央に位置する陪塚２号墳は、現存する最大の陪塚で一辺24.0m、高さ2.0mを測ります。墳丘では円筒埴輪列や葺石が確認され、須恵器の破片も採集されています。

遺跡位置図（国土地理院『椋本』1:25,000より）

また、陪塚２号墳と主墳の間には、長さ約5.5m、幅約4.2mの長方形の島状の高まりがあり、主墳の対称位置にも同様の高まりが残存しています。その性格は不明ですが、大阪府津堂城山古墳等に見られるような祭祀に伴う島状の遺構である可能性があります。

陪塚３号墳は、陪塚２号墳の北側に位置する陪塚で発見された時には、すでに壊されていて痕跡のみとなっていました。規模は、陪塚１号墳と同規模と推測されています。墳丘からは埴輪片が出土しています。

陪塚４号墳は、主墳の北23mに位置し、その規模は南北15m、東西16m、高さ1.8mを測ります。墳丘では盾形埴輪、蓋形埴輪が採集されています。陪塚４号墳の西にある陪塚５号墳は、規模は１辺15m、高さ0.7mで、埴輪片が出土しています。

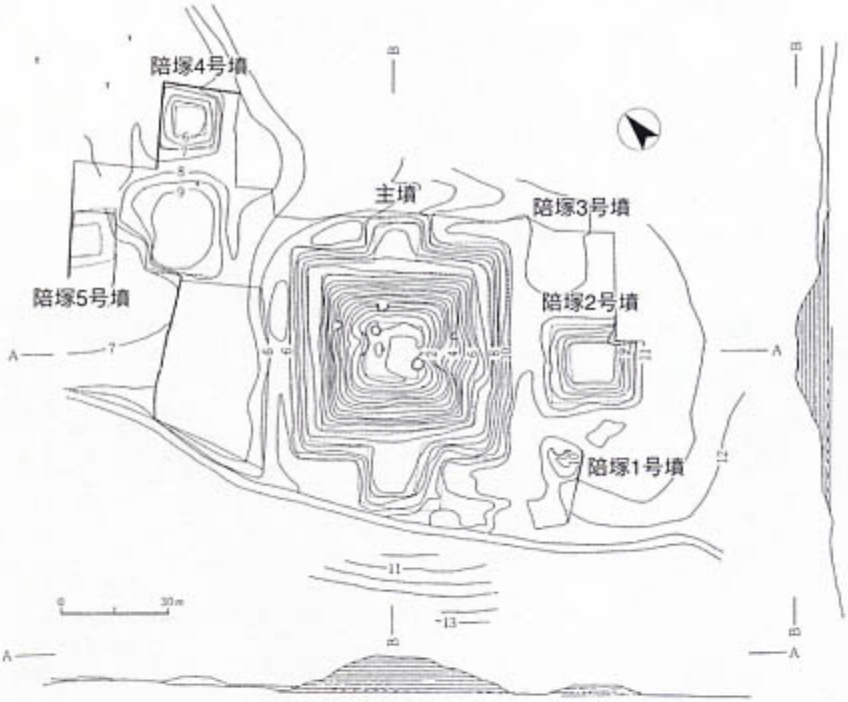
明合古墳群が形成された時期は、採集された遺物から５世紀前半～６世紀初頭で、主墳は５世紀前半に安濃川流域の首長墳として築造されたと推察されます。三重県下では、このような大型方墳による古墳群が築造されていないことから、三重県の古墳文化を考える上で注目される古墳群です。　（田中秀和）

古墳群全景（東から）

ヘラ記号のある円筒埴輪

蓋形埴輪

家形埴輪



明合古墳群（三重大学歴史研究会『ふびと』23号 1965より 一部改変）

陪塚４号墳採集　盾形埴輪

陪塚４号墳採集　蓋形埴輪

陪塚２号墳採集　須恵器 器台

津市埋蔵文化財センターのご案内

平成18年１月１日の市町村合併で津市埋蔵文化財センターの組織が新しくなりました。

津市埋蔵文化財センター

所在地　津市安東町1225

電　話　059-229-0210

久居分室

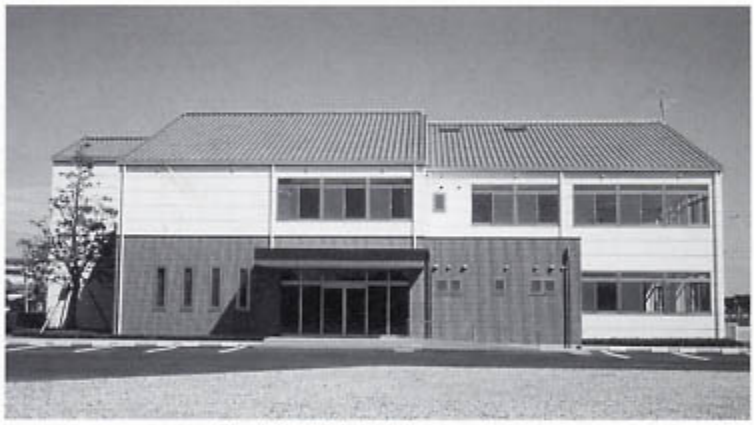
所在地　津市久居元町2119

電　話　059-259-2886

多気北畠氏遺跡調査分室

所在地　津市美杉町上多気1022

電　話　059-275-0777



津市埋蔵文化財センター

埋蔵文化財センターでは、主に次のような業務を行っています。

- ○ 埋蔵文化財の保護
- ○ 発掘調査等
- ○ 出土品等の保存・管理
- ○ 施設の公開や出土品の展示
- ○ 各種講座（出張講座･考古学講座等）

出張講座（小学６年生対象）

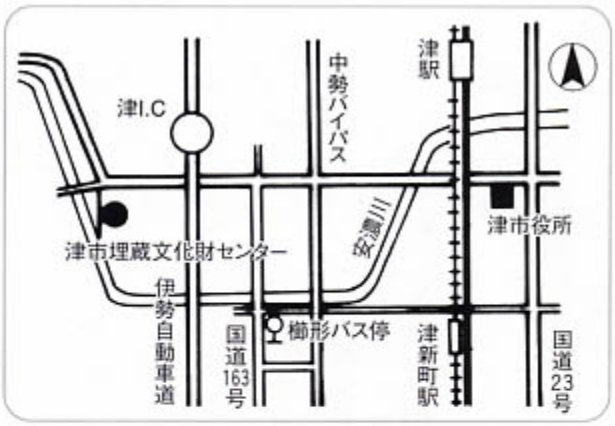
施設の見学や出張講座等については、事前に埋蔵文化財センターへお申し込みください。

お問い合わせは　埋蔵文化財センターへ

☎０５９－２２９－０２１０

平日 8:30～17:15(土･日､祝日､年末年始は休み)

※入場無料　駐車場あり



近鉄津新町駅よりバス「櫛形」下車 徒歩25分

編集後記

装いも新たに津市埋蔵文化財センター情報『まいぶん津』創刊です。今回は国指定史跡に焦点をあて、二つの遺跡を紹介しました。これからも、新たな“津市”の埋蔵文化財の情報をお届けしていきますので、ご期待ください。　（編集子）

発 行 日：平成18年12月28日

編集発行：津市埋蔵文化財センター

住　　所：〒514-0058

三重県津市安東町1225

TEL 059-229-0210

FAX 059-229-4601

印　　刷：株式会社一　誠　堂

R100

この冊子は古紙パルプ配合率100%の再生紙を使用しています。